



青年期自己愛的人格における誇大特性と過敏特性の 関係について : 相関分析, クラスタ分析, 文章完成 法を用いた補足的研究

相澤, 直樹

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 11(1):147-159

(Issue Date)

2003-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81000565>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000565>



青年期自己愛的人格における誇大特性と過敏特性の関係について －相関分析，クラスター分析，文章完成法を用いた補足的研究－

相澤 直樹*

On the relation between grandiose traits and hypersensitive traits of narcissistic personality

Naoki AIZAWA

問題

自己愛 (narcissism) という概念を最初に心理学の主要な概念として位置づけたのはFrued (1911, 1914) である。Fruedは、この概念を心理発達の一段階 (自体愛から対象愛へ至る中間段階) を意味するために用い、同時に対象選択の一つの典型 (自己の性質を相手に求める対象選択) を指示するために用いた。そして、臨床症状との関係では、特にパラノイアの誇大妄想に自己愛の機制を見出し、分析可能な感情転移神経症に対置して自己愛的神経症と呼んだ。その後、この概念は、主に精神分析の領域でさまざまな研究者によって取り上げられ、今日心理学分野の中では欠くことのできない重要なものとなった (Horney, 1939, A. Reich, 1960, Jacobson, 1964, Kernberg, 1975, Kohut, 1971, 1977)。

しかしながら、自己愛の概念がさまざまに拡大した領域で用いられるにつれ、その混乱が指摘されるようになった。そのような中、系統だった批判を展開したのがPulver (1970) である。Pulver (1970) は、初期の概念規定が多義的であったため、多くの自己に関する現象が自己愛の概念のもとに論じられる結果になったと指摘した。この混乱の反映が、自己愛を人格特徴の一つとしてとらえた自己愛的人格あるいは自己愛的人格障害 (以下ではまとめて自己愛的人格と呼ぶ) の現象像に関する以下のような議論に典型的にあらわれている。

従来、自己愛的人格は、誇大的で自己主張的な態度、搾取的で共感の欠如した対人関係、攻撃性の高さを中心とする性格特徴として論じられてきた。その流れは、Frued (1911, 1914) の研究とW. Reichの男根期的自己愛性格の概念に端を発し、Millon (1969) やKernberg (1975) の人格障害研究を通じて、最終的にはD S M－Ⅲ (American Psychiatric Association, 1980) における自己愛的人格障害の診断基準に結実した (Millon, 1998)。D S M－Ⅳ (American Psychiatric Association, 1994) では、他者からの批判や無関心に対する憤怒、劣等感、羞恥心などの感情的反応に関する診断項目が妥当性の問題から削除され、その結果一層誇大的な側面に集約された診断基準となった。しかし、その一方で、自己愛的人格にはそのような誇大的・主張的な側面だけでなく、控えめで自己否定的な態度や他者の反応に過敏で傷つきやすい側面が見られることを指摘する研究者も多くいた。Kohut (1971, 1977) は、自己愛的人格の現象的・記述的特徴を明確に示してはいないが、実際には軽蔑への過敏さ

*神戸大学大学院総合人間科学研究科 発達臨床論講座

(2003年4月30日 受付)
(2003年5月14日 受理)

や抑うつ傾向、自発性の欠如、心氣的傾向を示す患者もその中に含めた。Akhtar & Thomson (1982) は、DSM-IIIに示されたような顕在的な自己愛的人格とは別に、過敏さや劣等感、他者への羨望や不満感を示す潜在的な自己愛的人格という分類を設定し、両者の特徴を自己概念、対人関係、社会適応、倫理基準と理想、愛情と性、認知スタイルの領域にわたって対比させた。また、Rosenfeld (1987) は、精神分析療法における治療的停滞を論じた文献の中で、自己愛的な患者に鈍感な (thick-skinned) 人々と敏感な (thin-skinned) 人々がいることを報告した。最近では、Cooper (1998) が潜在的な自己愛的人格について、DSM-IVの診断基準にしたがって顕在的な自己愛的人格との比較検討を行っている。その他、心理学統計を用いた研究としては、Mullins & Kopelman (1988) が自己愛的人格に関係する4つの尺度に因子分析を施し、リーダーシップや注目願望などの誇大的な因子以外にも、不幸感や過敏さなどの過敏で消極的な因子も抽出した。また、Wink (1991) はMMP Iの6つの自己愛的人格尺度に主成分分析を行い、傷つきやすさ-過敏さと誇大性-顕示性の2成分を見出した。

以上のような流れの中、自己愛的人格の全体像を最初に系統的に分類したのがGabbard (1994) である。Gabbard (1994) は、先行研究のさまざまな下位分類が無関心な自己愛者 (oblivious narcissist) と過剰警戒的な自己愛者 (hypervigilant narcissist) の2類型を両極とする連続体上に位置づけられるとした。前者は、傲慢さ、自己没頭、注目願望、自己主張性、他者への無関心を中心とする類型で、DSM-IIIが提示した診断基準に近い。一方、後者は、内気、自己抑制、他者回避、傷つきやすさを中心とする類型である。そして、実際の患者は、両タイプのいずれかが顕著なものか、両者の特徴が混在した様相を示すとした。この研究は、従来論じられてきた自己愛的人格の多様な現象像をかなり明確に整理したものと言える。

しかし、これをもってPulver (1970) が指摘した概念上の混乱が解決したとは考えられない。なぜならば、前述の2類型はその表面的特徴を見る限り大きく異なっており、むしろ部分的には正反対とも言える特徴を示しているからである。むしろ、Gabbard (1994) の研究は、自己愛的人格の多様な現象像を整理することによって、自己愛概念の定義に関わる一つの課題領域を明確化することに寄与したと言える。それは、無関心型と過剰警戒型という表面的には大きく異なる現象像を包含しうる自己愛的人格の定義をいかに達成するかであり、換言すれば、無関心型と過剰警戒型の関係をどのように位置付けるのかという問題である。

最近になって、この点に焦点を当てた研究が見られるようになった。岡野 (1998) は、恥に関する精神分析学の観点から、自己愛的人格の無関心型と過剰警戒型を、自己愛的欲求としての“自己顕示欲の強さ”と身体生理的な過敏さに基づく“恥に対する過敏さ”の2変数で説明し得るとした。つまり、“自分を理解してほしい、話を聞いてほしい”という自己愛的な欲求から生じる自己顕示欲の強さを背景に、それに加えるに身体・生理的な過敏性を強く持っている場合には自己愛的人格の過剰警戒型となり、そうでない場合には無関心型となるということである。また、Cooper (1998) は、顕在的な自己愛的人格 (ここで言う無関心型) と潜在的な自己愛的人格 (ここで言う過剰警戒型) の諸特徴を比較し、両者とも誇大的空想に基づく自己表象と自己評価の機能不全が見られるものの、後者においては、誇大的空想の直接的な意識化と表出が自己不一致感や罪責感をもたらすために、自己意識や対人関係の領域で逆に過剰な羞恥心の強さ、謙虚さ、消極性として表出されることを指摘した。また、相澤 (2002) は、誇大な特性と過敏な特性をともに含む自己愛的人格の質問項目群を作成し、因子分析を通じて7因子構造を抽出している。さらに、先行研究からその潜在変数について2因子モデルと3変数因果モデルを仮定し、共分散構造分析を用いて3変数因果モデルの妥当性を支持する結果を得た。小塩 (2002) は、自己愛的人格によって青年を分類する試みの中で、NPI-S (自己愛的人格目録短縮版) に主成分分析を施して、自己愛全体の指標となる自己愛総合の主成分と、注目・賞賛願望と自己主張性のいずれが優位に関わる主成分の2成分を抽出した。そして、自己愛総合が高く自

己主張性が優位な群が無関心型に相当し、自己愛総合が高く注目・賞賛願望が高い群が過剰警戒型の自己愛的人格に相当するとした。以上のように、自己愛的人格を無関心型と過剰警戒型に分類した場合に、両者の関係をどのように位置づけるかという問題が今後の重要な課題の一つになりつつある。

本研究では、以上のような研究の流れにあって、自己愛的人格に関する補足的な資料をえて今後の研究への方向性を得るために、以下のような探索的な分析を試みることにした。まず、相澤 (2002) の自己愛的人格項目群の下位尺度について相関係数を算出した。これにより、誇大な側面と過敏な側面の関係を検討した。さらに、同じ質問項目群でクラスタ分析を実施し、一般青年がどのような下位群に分類されるかを探索的に検討することとした。これにより、誇大な側面と過敏な側面が実際にはどのような配分で一般青年の中に現れるのかを検討することができる。また、同時に自己意識に関する文章完成法を実施して、自己愛的人格と自己意識の関係を検討することにした。これにより、評定尺度法とは異なった観点からその自己意識の様相を検討できるものと思われた。

なお、無関心型および過剰警戒型という分類に関して、Gabbard (1994) 自身も“これらの2つのタイプは純粋な形でも生じるが、患者の多くは2つのタイプの混合した現象の様相を呈する (館沢, 1997, p.91)”と述べていることから、類型としてよりも特性として論じるほうが妥当であると思われた。また、無関心型や過剰警戒型という表現も日本語には馴染みがないように思われたので、以下では無関心型と過剰警戒型のかわりに、誇大特性と過敏特性という概念を用いることにした。

方法

1. 調査対象

調査対象は、近畿圏の大学生・大学院生295名 (男性108名, 女性187名)。年齢の平均は20.35歳, 標準偏差は1.99であった。調査期間は、2000年12月から2001年6月であり、質問紙の配布と回収は主に講義時間内に手渡しで行われ、一部は郵送により配布・回収を行った。

2. 測定尺度および文章完成法

①自己愛的人格項目群

相澤 (2002) による自己愛的人格項目群を用いた。これは、Raskin & Hall (1979, 大石訳, 1987) のNarcissistic Personality Inventory, Murray (1938, 外林訳, 1961) のPersonality Inventory中のNarcissism項目, O'Brien (1987) のO'Brien Multiphasic Narcissism Inventory, Mullins & Kopelman (1988) の自己愛項目群, 高橋 (1998) のナルシズム的人格尺度, および、2つの対人恐怖傾向尺度 (田中・穂苅・福田・小川, 1994, 相澤, 1997) の項目を収集整理し、自己愛的人格の誇大特性と過敏特性の両者を含むように作成された質問項目群である。因子分析 (主因子法, プロマックス回転) の結果, 7因子解 (対人過敏, 対人消極性, 自己誇大感, 自己萎縮感, 賞賛願望, 権威的操作, 自己愛的憤怒) を抽出し, YG性格検査の下位尺度との間で妥当性が支持されている。「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの5段階評定で対象に実施される。

②文章完成法

自己および他者に関する刺激文について、精研式文章完成法 (佐野・横田, 1960) を参考に検討した。その結果, 11個の刺激文に決定した (私はよく人から、私が嫌いなのは、私の容姿は、人々、将来、世の中、友達、私はよく、私がよく思い出すのは、私の気持ち、どちらかと言えば私は)。これらの語句に続いて空欄を設け、刺激文から想起される内容を自由に記入するように求めた。

結果

1. 自己愛的人格項目群の下位尺度間相関

本研究の自己愛的人格項目群のデータは相澤 (2002) の一部を用いている。そのため、下位尺度構

成は、相澤（2002）の7下位尺度（対人過敏、対人消極性、自己誇大感、自己萎縮感、賞賛願望、権威的操作、自己愛的憤怒）に従うこととした（TABLE 1）。各下位尺度の信頼性係数（ α 係数）は、.91, .85, .75, .74, .60, .68, .73であった。このうち、自己誇大感、賞賛願望、権威的操作および自己愛的憤怒が内容的に誇大特性に属し、対人過敏、対人消極性および自己萎縮感が過敏特性に属することから、これらの間の相関係数を算出した。結果をTABLE 2に示す。

TABLE 1 自己愛的人格の下位尺度項目（a は誇大特性項目、b は過敏特性項目）

<第1下位尺度：対人過敏>		<第4下位尺度：自己萎縮感>	
b20. 自分が相手の人に嫌な感じを与えているのではないかと不安になる		b01. 気が弱い	
b17. 自分が他人にどのような印象を与えているのか、とても気になる		b25. 決断力がない	
b22. 人といくと、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる		b28. 引っ込み思案である	
b26. 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる		b13. 自分の意見が正しいと思っても強く主張できない	
b11. 周りの人の視線が気になり落ち着かない		第5下位尺度：賞賛願望	
b21. 周囲の視線が気になって、動作がぎこちなくなる		a27. 人の注目を浴びるのが好きだ	
b05. 失敗するのではないかといつも不安になる		a21. 人から賞賛されたいという気持ちが強い	
b15. 少しでも批判されたり非難されたりするとひどく動揺する		a25. こそこそという時には大胆に自己アピールをしたい	
b16. 先のことをよくよく考えすぎる		a04. 人前で発表をしたり演技をしたりするのが得意だ	
b08. 何かにつけ、他人の方が上手くやっているように感じる		a01. 人の話に耳を傾けるよりも自分のことをもっと話したい	
b24. 自分に自信がない		<第6下位尺度：権威的操作>	
b18. 人といても自分だけが取り残されたような気持ちになる		a13. 自分の役に立つかどうかで友達を選ぶことは、正当なことである	
b10. 大勢の人の前にいると、自分が圧倒されてしまう		a26. 人々に従わせられるような権威をもちたい	
<第2下位尺度：対人消極性>		a06. 必要ならば罪悪感を感じることなく、人を利用することができる	
b30. 人と自然につき合えない		b19. 根気がなく何をしても長続きしない	
b32. 人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない		a28. 私の意見や考えに周りの人に従わせることができれば、もっと物事がうまく進むのと思う	
b23. 人に近づきたい気持ちがあるにもかかわらず、人を避けてしまう		<第7下位尺度：自己愛的憤怒>	
b06. 人と心から打ち解けて付き合うことができない		b12. 人に軽く扱われたことが、後々腹が立って仕方がないことがある	
b33. 内気な方である		a34. 人に侮辱されたり蔑まれたりすると、怒りを抑えられなくなる	
b31. 人と対面すると、相手を意識して緊張する		a22. 人から不当な評価を受けることには我慢がならない	
b03. 知っている人を見かけても、顔を合わさないように道を避ける		b27. 対人場面でその場は何とも思わなくても、後々腹が立つ事がある	
b02. 無理して人に合わせようとして、窮屈な思いをする			
<第3下位尺度：自己誇大感>			
a20. 私にはもって生まれたすばらしい才能がある			
a31. 他の人とは違って、自分はたぐいまれな存在である			
a10. 自分にはどこか人を魅了するところがあるようだ			
a12. 自分の思想や感性にはかなり自信がある			
a18. 自分はきっと将来成功するのではないと思う			
a02. 私は今までにたぐいまれな経験を積んできた			
a08. 自分の体を人に自慢したい			
a03. 自分自身では、要領もいろいろ賢明さも備えていると思う			
a15. 自分が偉大な人間になっているような空想をする			

TABLE 2 自己愛的人格項目群の誇大特性下位尺度と過敏特性下位尺度の相関

	自己誇大感	賞賛願望	権威的操作	自己愛的憤怒
対人過敏	-.217**	-.080	.203**	.396**
対人消極性	-.166**	-.210**	.136*	.281**
自己萎縮感	-.341**	-.381**	-.016	.101

*p<.05 **p<.01

2. クラスター分析

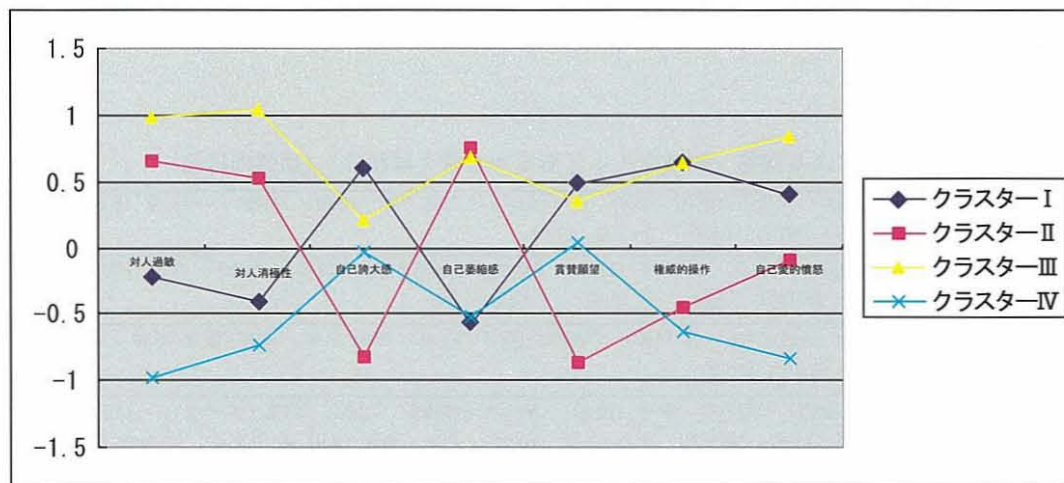
被験者を下位分類するために、各下位尺度得点のZ得点を用いてクラスター分析（平方ユークリッド距離－Ward法）を実施した。その結果、各クラスターの下位尺度得点の平均値から、内容的に有

意味な下位クラスターが得られた4クラスター解を採用することとした。さらに、各クラスターの特徴を正確に検討するため、下位尺度得点ごとに一元配置の分散分析を行った。すべての主効果が有意な値となったので、多重比較（Tukey法）を行った。結果をTABLE 3に示す。また、分かりやすく表現するために、下位尺度得点を標準化してグラフに表現したものをFigure 1に示す。

TABLE 3 クラスターの下位尺度得点の平均と標準偏差

	クラスター I n=81	クラスター II n=71	クラスター III n=58	クラスター IV n=88	多重比較 (Tukey 法)
対人過敏	38.3 (6.39)	48.1 (8.13)	51.8 (7.52)	30.0 (6.60)	IV < I < II < III
対人消極性	20.2 (4.78)	26.7 (5.55)	30.4 (4.92)	17.9 (5.23)	IV < I < II < III
自己誇大感	25.8 (5.08)	17.5 (3.60)	23.4 (5.13)	22.1 (5.62)	II < III < I, II < IV < I
自己萎縮感	10.3 (2.48)	15.3 (2.41)	15.0 (3.34)	10.5 (3.26)	I < II, I < III, IV < II, IV < III
賞賛願望	16.8 (2.85)	11.8 (2.87)	16.3 (2.85)	15.2 (3.89)	II < III, II < IV < I
権威的操作	14.2 (3.21)	10.1 (2.91)	14.2 (3.27)	9.4 (2.68)	II < I, IV < I, II < III, IV < III
自己愛的憤怒	14.2 (2.33)	12.5 (3.40)	15.7 (2.59)	9.9 (2.60)	IV < II < I < III

FIGURE 1 クラスターの下位尺度得点の平均



クラスター I の平均値を見ると、自己誇大感が他のクラスターに比して最も高く、賞賛願望、権威的操作、および、自己愛的憤怒がクラスター II・IV よりも有意に高い。同時に、対人過敏、対人消極性、および、自己萎縮感の過敏特性下位尺度で他のクラスターよりも低い値を示していることから、誇大特性下位尺度のみで高得点を得ている被験者群であると言える。したがって、このクラスターを“誇大群”と命名した。クラスター II は、逆に、対人過敏、対人消極性、および、自己萎縮感でクラスター I・IV よりも有意に高い値を示し、誇大特性下位尺度では有意に低い値を示している。したがって、過敏特性のみで高得点を得ている被験者群であると言えることから、このクラスターを“過敏群”とした。クラスター III に関しては、対人過敏、対人消極性、および、自己愛的憤怒では最も高い平均値を示し、自己萎縮感ではクラスター I・IV よりも、権威的操作ではクラスター II・IV よりも有意に高い値を示したことから、誇大特性と過敏特性に関わらず高い値を示す群であると見れる。しかし同時に、自己誇大感が誇大群より有意に低い値を示し、同時に、賞賛願望がクラスター IV との間に有意差を示さなかったため、これらの下位尺度では平均的な値であると言える。以上のことから、過敏特

性と誇大特性の両者を高く示すとは言いがたいまでも、両特性でともに平均以上の値を示していることからクラスターⅢを“両有群”と命名した。最後に、クラスターⅣは、対人過敏、対人消極性、自己愛的憤怒で最も低い値を示し、自己萎縮感で過敏群・両有群よりも有意に低い値を、権威的操作で誇大群・両有群よりも低い値を示した。一方、自己誇大感と賞賛願望では、誇大群よりは有意に低いものの平均的な値を示した。このことは、対人場面で齟齬を生じるような傾向は低く、適度な自信や自己主張性を示唆するものと考えられたので、このクラスターを“適度群”とした。

3. 文章完成法

本研究では、評定尺度法とは異なる観点から自己愛的人格の自己意識を検討するために、文章完成法を用いた。実施の段階では11個の刺激文を用いたが、以下では特に自己意識に関係すると思われる4個の刺激文(①どちらかと言えば私は、②私はよく人から、③私の容姿は、④友達)の結果のみを取り上げる。得られたデータの分析にあたっては、クラスター分析の結果得られた下位群ごとに、KJ法に習って回答項目の分類整理を行った。すなわち、各群の特徴を反映するため、事前に分類の枠組みなどは設けず、回答群の内容に即して回答を分類して行き、最終的に10個程度の上位回答群に整理されるように試みた。そして、各上位回答群の内容を最も反映すると思われる1～2語の言葉を付して、その名称とした。最後に、各クラスター間で比較がしやすいように、上位回答群の名称表現をできるだけ統一するように修正を施した。以上の手続きで得られた結果をTABLE 4～TABLE 7に示す。

TABLE 4 文章完成法による回答(刺激文①:どちらかと言えば私は)(括弧内は%)

誇大群	内気・臆病 (18.5) 元気・前向き (16.0) いいかげん・気まぐれ (13.6) 楽観的・のんき (8.6) しっかりしている・できる (13.6) その他 (21.0)
過敏群	内気・消極的 (29.6) のんき・のんびり (18.3) いいかげん・気まぐれ (11.3) 明るい・幸せ (8.5) まじめ・がんばり屋 (5.6) 頭が悪い (5.6) 変 (5.6) その他 (12.7)
両有群	暗い・内気 (29.6) 分からない・変 (19.0) 明るい・豊か (13.8) だめ (8.6) 偏屈・勝気 (8.6) 寂しがり (5.2) 自分勝手 (5.2) その他 (10.3)
適度群	受動的・牧歌的 (26.1) 明るい・幸せ (12.5) 前向き・積極的 (12.5) 内気・おとなしい (12.1) 神経質・寂しがり (11.4) 楽天的・マイペース (10.2) 短気・強気 (6.9) 変 (11.4) その他 (11.4)

TABLE 5 文章完成法による回答(刺激文②:私はよく人から)(括弧内は%)

誇大群	変 (18.5) しっかりしている・頼られる (13.5) 明るい・元気 (12.3) のんき (9.8) まじめ・賢そう (9.8) 感情的 (7.4) 幼い (7.4) 愛想がいい (7.4) その他 (13.5)
過敏群	のんき・頼らない (26.8) しっかりしている・頼られる (14.1) 悪い・嫌われる (14.1) いい人・おもしろい (11.3) まじめ・几帳面 (9.8) 第一印象と違う (8.5) 変 (8.5) その他 (7.0)
両有群	おとなしい (15.5) 幼い・かわいがられる (13.8) いいひと・やさしい (12.1) 明るい・おもしろい (10.3) まじめ・心配性 (10.3) 変 (10.3) 誤解される (8.6) その他 (10.3)
適度群	ぼんやりしている・おとなしい (26.1) しっかりしている・頼られる (17.0) 明るい・おもしろい (14.8) 変 (10.2) いい人・やさしい (5.7) その他 (26.1)

(“と言われる” “と見られる” は略)

TABLE 6 文章完成法による回答(刺激文③:私の容姿は)(括弧内は%)

誇大群	普通・人並み (34.6) あまり良くない・気に入らない (18.5) よい・好き (17.3) 個性的・特徴的 (11.1) 太め・ぽっちゃり (8.4) その他 (11.1)
過敏群	良くない・気に入らない (46.5) 普通・人並み (21.1) 幼い・小さい (18.3) よい (5.6) よく分からない (4.2) その他 (4.2)
両有群	良くない・劣っている (32.8) 普通・人並み (22.4) 人並以上・まずまず (13.8) 分からない (10.3) 気に入らないところがある (6.8) その他 (13.8)
適度群	普通・人並み (38.6) 人並み以上・まずまず (11.4) あまり良くない・気に入らない (11.4) 太め・ぽっちゃり (8.0) 分からない・気にしない (8.0) 幼い・小さい (8.0) 愛嬌がある・個性的 (5.6)

TABLE 7 文章完成法による回答(刺激文④:友達)(括弧内は%)

誇大群	大切 (48.1) 大好き・楽しい (17.3) 友人と親友は別 (7.4) 少ない・多くはない (6.1) 多い・恵まれている (6.1) 距離を保つ (4.9) まあまあ (4.9) その他 (6.2)
過敏群	大切 (25.4) もっとたくさんほしい・仲良くなりたい (16.9) 大好き・楽しい (15.5) 狭く深く・少なくともいい (8.5) 難しい・分からない (7.0) 少ない・多くはない (5.6) その他 (9.8)
両有群	大切 (24.1) 少ない・少なくともいい (20.7) 楽しい・いい (17.2) 難しい・分からない (15.5) もっとたくさんほしい・仲良くなりたい (13.8) 多い・順調 (5.2) その他 (3.4)
適度群	大切 (36.4) 大好き・楽しい (31.8) もっとたくさんほしい・多い (11.4) 難しい (6.8) 少なくともいい (6.8) 友達と親友は別 (3.4) その他 (11.3)

考察

1. 誇大特性下位尺度と過敏特性下位尺度の相関について

誇大特性下位尺度と過敏特性下位尺度の相関係数を見ると、負の相関から無相関、正の相関にわたる範囲の値があらわれていることが分かる。誇大特性と過敏特性の記述的な特徴では一見相反する関係にあるという印象を得るが、実際の両者の関係は、必ずしもそのように単純なものではないと言える。この結果は、両者の関係を理解するためには、何らかの理論的に込み入った仮説が必要であることを示唆している。

個々の相関係数を見ていくと、以下のような特徴がある。まず、いくつかの負の相関関係を示唆する結果が見られる。自己誇大感と対人過敏、自己誇大感と自己萎縮感、賞賛願望と対人消極性、賞賛願望と自己萎縮感がそれにあたる。要約して見ると、特に数値的に高い負の相関関係が、誇大特性の中では自己誇大感と賞賛願望、過敏特性の中では自己萎縮感に集まっていることが分かる。したがって、これらは両特性の関係の中で最も遠い位置にある特徴であると言える。また、そのうちの2つを自己像に関係する下位尺度(自己誇大感、自己萎縮感)が占めることから、この結果をそのまま解すれば、両特性は評価的な自己像の領域で最も相反する特徴を示すことになる。ただし、自己愛的人格を“理想自己”と“恥ずべき自己”の双極構造として論じた岡野(1998)が示唆するとおり、自己愛的人格では、誇大的な自己像が意識される場合、萎縮的な自己像は否認されやすく、萎縮的な自己像が意識される場合、誇大的な自己像は否認されやすいという関係が考えられる。また、Cooper(2002)も、潜在的な自己愛的人格(ここで言う過敏特性)では、潜在的な誇大的空想が自己不一致感や罪悪感をもたらすために意識されにくいことを指摘している。今回の手法が回顧的な努力を求める評定尺度法であり、その分被験者の否認や忘却の影響があらわれやすいことを考慮すると、以上の結果の解釈には慎重でなければならない。

一方、弱いあるいは中程度の正の相関関係が示唆されたのは、対人過敏と権威的操作、対人過敏と自己愛的憤怒、および、対人消極性と自己愛的憤怒であった。これらの結果は、その特性の表面的な特徴からは一見意外のように思われる。しかし、Cooper(2002)は、潜在的な自己愛的人格では、前

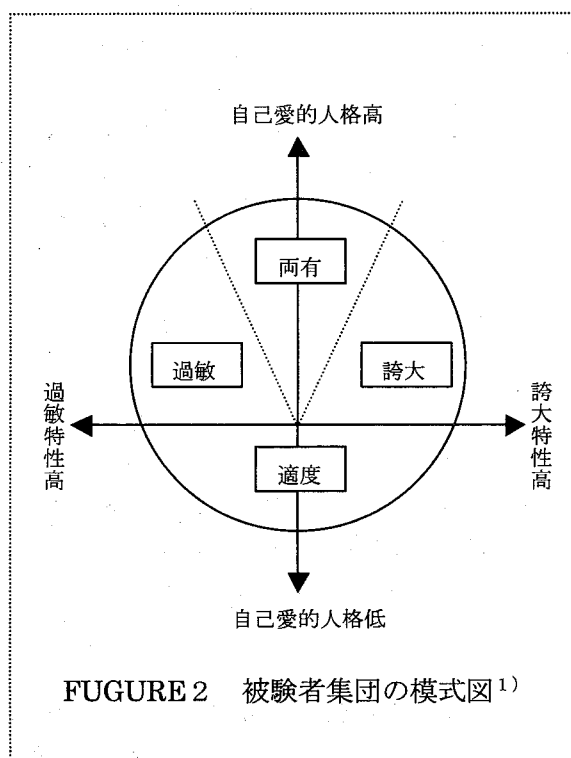
述と同じ理由から、搾取的な意識や共感的能力の欠如が過剰な対人的配慮によって偽装されることや、尊大で傲慢な対人的態度が過剰な謙虚さや引き下がりによって代わられるという相互関係を考察している。上記の結果は、この推測を直接支持するものとは言えないまでも、過敏特性に見られる他人的な過敏さや消極さが単なる気の弱さや内気さだけでは十分説明しきれない可能性があること、同じく、誇大特性に見られる他者に対する操作的な態度や攻撃的な感情が単なる尊大さや傲慢さのみに基づくものとは必ずしも言えないことを示唆している。また、これらの下位尺度は、いずれも誇大特性と過敏特性の中で対人関係領域に関わる下位尺度であると言える。その意味では、両特性の対人場面での経験に何らかの共通する要因があることを示唆する（ただし、賞賛願望は除く）。ここで、自己像で見られた負の相関関係を視野に入れ、同時に、自己像が内的な定着の要素であり、対人関係が外的な経験的要素であることを考え合わせると、対人関係において共通する要因を持つ経験がなされているものの、それが自己像の領域に定着する際に異なった意味付けや位置づけがなされることが両特性の差異に結びつくという関係を推測することもできる。

2. クラスタ分析の結果について

本研究では、誇大特性と過敏特性の実際的な様相をとらえるために、探索的なクラスタ分析を実施した。その結果、内容的に意味のあるクラスタ構造として4クラスタを抽出した。そして、一要因の分散分析を用いてクラスタごとの下位尺度得点の差異を検討し、それぞれを誇大群、過敏群、両有群、適度群と命名した。

通常2つの特性を用いて4クラスタ構造を抽出した場合、その2特性が独立的な変数であることを示唆する。しかし、その4クラスタは、この場合、誇大群、過敏群、両高群、両低群となるはずである。今回の結果では、両高群と両低群のかわりに両有群と適度群が抽出されており、ここでも誇大特性と過敏特性が何らかの関係を持つことが予想される。特に、適度群の下位尺度得点の平均を見ると、平均程度の自信と主張性を持ち、対人場面における過敏さや傷つき経験が少ない人たちと言え、

その意味では適度な自尊感情の特性を有する群と理解できる。したがって、誇大特性と過敏特性が低い人たちとするよりも、自己愛的な特性そのものが強くない人たちと位置づけるほうがふさわしい。それに対し、他の3群はいずれも自己愛的な特性を示す人たちで、その中に誇大特性を強く示す人たちと過敏特性を強く示す人たち、および、両特性を有する人たちという分布が見られると考えられる。同時に全体の人数分布を見ると、適度群は全体の30%程度を占めるに過ぎず、残りの被験者がいずれかの自己愛群に属していることになる。以上の点を考慮して、被験者全体の分布をイメージとして図にするならば、自己愛的人格全体を規定する軸と両特性に分類する軸との二次元平面に対し、その若干上部に被験者集団の全体が位置づけられるものとして表現できる。つまり、FIGURE 2 のようになる。



ここで、この図式に照らして見ると、今後の研究課題として以下のことが言える。まず、第

一に縦軸である自己愛的特性をどのような心理的特性として理解するかという問題があげられる。この点については、多くの先行研究の蓄積があるが（レビューとして上地・宮下1992ab）、今後も検討されるべき領域である。もう一つは、横軸、つまり、誇大特性と過敏特性に分かれる要因としてどのようなものを位置づけるかという問題である。この領域にも前述のいくつかの先行研究が見られるが、縦軸の問題と比較して未だ多くはなされていない。最後に、今回の図では便宜上両軸を直交させたが、必ずしもそうであるとは限らない。軸そのものの関係も含めて総合的に検討される必要がある。

3. 文章完成法

本研究では、評定尺度法とは異なる手法で自己愛的人格と自己意識の関係を検討するために文章完成法を用いた。文章完成法は、比較的短文の刺激文に対し被験者が想起した内容を記入させる手法で、投映法検査の一つに位置づけられる。投映法検査の原理は、標準化検査法に比較して規定性が相対化されている課題に対して、被験者が選ぶ関わり方の中に、被験者の在りようが構造的に反映されるとともに、無規定部分を自ら満たす内容と主題の中に、被験者の自己が開示されることにある（辻, 1978）。それゆえ、被験者の中核的な人格構造が反映されやすいと言えるが、課題の規定性が相対化されている分、実施状況の影響を受けやすい（辻, 1998）。中でも文章完成法は、文字という構成度の極めて高い刺激と反応を用いており、実施状況に喚起される被験者の内的状況に基づく検閲や選択の影響を受けやすいと予想される。集団実施という今回の実施状況の中では、まず第一に紋切り型反応・典型的反応の増加が予想されるし、実際に各群に共通して高頻度に出現する回答群が見られるが、それらの回答は、その群の特徴を表すものとしてはある程度減免して考慮される必要がある。逆に、たとえ出現度数が高頻度ではなくても、特定の群に独自に出現した回答群はその特徴を反映するものとして軽視できない場合があるとも考えられる。また、別の集団実施の影響として、回避的反応や諧謔的反応などの出現も予想される。以上の影響に加え、今回の文章完成法は課題の数が少なく、それらの弁別が困難であるために、結果の信頼性と妥当性はそれだけ不安定なものとならざるを得ない。以下では、あくまで補足的・探索的資料として考察を試みる。

まず、刺激文①“どちらかと言えば私は”に関する結果を見る（TABLE 4）。この結果は、自己意識の内容を直接問うものと言える。誇大群の回答内容を見ると、最も高い頻度で“内気・臆病”が出現しているのが目立つ。この回答内容は、誇大群の特性とは不一致なものである。ただし、自己愛的人格に理想自己と恥ずべき自己の双極構造を仮定し、誇大特性が優位な人たちでは後者が否認されやすいという岡野（1998）の指摘を考慮すると、文章完成法では、その過敏で消極的な自己像が表現された可能性が考えられる。その他の回答内容は、基本的に誇大特性の積極的で活動的な特徴と一致するものが多い。過敏群の結果を見ると、“内気・消極的”が最も多く見られた。これは、過敏特性の特徴と一致するものである。“のんき・のんびり”も多く見られ、これは過敏特性とは一致しにくい内容である。その他、独自の回答項目として“頭が悪い”というのが出現しているが、過敏特性の自己萎縮性のあらわれである可能性がある。両有群に目を向けると、“暗い・内気”が最も高頻度に見られる。これは、誇大群の“内気・臆病”や過敏群の“内気・消極的”の回答群と比較して、内容的に否定的な意味合いの強いものである。“分からない・変”や“だめ”、“偏屈・勝気”という回答群も含めて、全体的に他と比較して否定的な表現が多い印象である。このことは、両有群が他群に比して否定的な自己意識を有していることを示唆する。“明るい・豊か”“自分勝手”も少なからず見られるが、これらについては両有群が持つ誇大特性の影響が考えられる。適度群では、“受動的・牧歌的”と見る回答が最も多く見られた。その意味では、この群は、実際には受身的・依存的な人たちが多く含まれるのかもしれない。ただし、その他を見ると、“明るい・幸せ”“元気・積極的”などを含め、若干統一性を欠いた回答群が10%代で分布している。したがって、自己愛的な人格としてはとらえられないさまざまな人たちが含まれる集合とみなし得る。

次に、刺激文②“私はよく人から”に関する結果を見る (TABLE 5)。これは、他者から見た自己像として被験者が持っている自己意識を主に問うものと言える。誇大群で最も多く見られたものは“変”であった。この結果は意外なものかもしれないが、個々の回答は必ずしも否定的なものだけでなく、特殊性・独自性を意味合いとして含むものが少なくなかった。その意味では、誇大特性の特殊意識・特別意識の緩和された表現の可能性がある。その他、“しっかりしている・頼られる”“明るい・元気”という比較的高頻度で見られる回答群は誇大特性と一致する。“感情的”“幼い”という回答は少数であるが独自のものであり、事実としてそのようなことを他者から言われているとすれば、誇大特性が示す傷つきやすさ、子どもっぽさを示唆する。“愛想がいい”も独自であるが、実際にこの群に含まれる人たちが、かなり緩和された程度の誇大特性を示す人たちである可能性を示唆する。過敏群に目を移すと、“のんき・頼りない”が最も多く意外であるが、心もとなさや頼りなさとして見れば、過敏特性に不一致とまでは言えない。“しっかりしている・頼られる”という回答群が多数見られたが、これは誇大特性に一致するものである。その意味では、誇大群の刺激文①で見られた“内気・臆病”と同じ解釈、つまり、過敏群の人たちが持っている誇大特性的な側面が、文章完成法という手法であらわれた可能性が考えられる。誇大群で自己意識を問う刺激文で見られた現象が、過敏群では他者から見た自己像として見られたのは、後者では周囲の視点から自己をとらえることが優位であることと関係するかもしれない。その他、“悪い・嫌われる”という内容は基本的に過敏特性と一致する。それと対照的に、“いい人・おもしろい”というのは不一致であるが、周囲の人に過剰に気を使うことの結果であるかもしれない。“第1印象と違う”というのは独自であるが、自己と行動の不統合さを示唆する。両有群では、頻度の高い回答群を見ると、穏やかで肯定的な内容が主流を占めていることが分かる。これは、前述の刺激文①の特徴とは鋭い対立を示しており、極めて印象的である。今のところその理由は推測できないが、この群における自己意識と他者の視点から見たものとしての自己像との不一致を示唆する可能性がある。最後に適度群では、ほとんどすべてが穏やかで肯定的な回答群で占められ、このことは適度な自尊感情を持つ人々としてのこの群の性質と一致する。

刺激文③“私の容姿は”に関する結果 (TABLE 6) は、自己の容姿・外見に関する自己意識を問うものと言える。誇大群を見ると、“普通・人並み”が最多数を占める。誇大特性とは不一致な印象を抱かせるが、これと類似した回答群は他群でもかなり高頻度を占め、その意味で典型的な紋切り型回答である。ただし、特に他群よりも高頻度を占めたのは、一般に容姿における“普通・人並み”という表現が額面どおりよりも肯定的な意味合いが強いことによると思われる。“あまり良くない・気に入らない”が多く見られたのは、前述の自己意識における“内気・臆病”と同じ解釈が可能かもしれない。ただし、この回答群の個々の表現自体は、過敏群と両有群に比較すると決して強いものではない。“よい・好き”は、容姿・外見に関する表現としてはかなり肯定的なものであり、これが高頻度で見られたのは誇大特性の特徴と一致する。“個性的・特徴的”も肯定的な意味合いである。“太め・ぽっちゃり”は否定的なものであるが、数としては少数である。一方、過敏群では、“良くない・気に入らない”が約半数と圧倒的多数を占めた。内容的にも過敏特性に一致するものである。“普通・人並み”も多く見られたが、他群と比較すると最も少ない。“幼い・小さい”が次に多数を占めるが、萎縮した自己像を具象化して認知したものと理解すれば不一致ではない。“よい”としたのはわずか5%程度にとどまったことも特徴的である。両有群では、“良くない・劣っている”が最も多数を占めた。過敏群に比較して頻度は少ないが、内容的には一層否定的な回答が多く含まれている。これは、基本的に刺激文①の結果と機を一にしている、この群の自己意識における葛藤の強さを具象化して認知しているものと思われる。逆に、“人並み以上・まずまず”とした回答も少なからず見られたが、これは誇大特性の影響が考えられる。“分からない”としたものが10%以上見られたのは、自己意識の混乱を反映している可能性がある。“気に入らないところがある”というのが特異的に見ら

れたが、その意義は明らかではない。適度群では、“普通・人並み”の紋切り型的回答を除けば、10%前後の頻度でさまざまな意味の回答が広く分布している。ここにも自己愛的ではない群として、さまざまな被験者からなる集合であることが見て取れる。肯定的な回答群も否定的な回答群も表現としては穏やかなものが多く、適度な自尊感情を示す人々としてのこの群の特性を反映している。

刺激文④“友達”に関する結果を見る (TABLE 7)。この刺激文は、直接自己意識を問うものではないが、友人関係に関する認知は特に自己意識に関係が深いと考えられたので分析の対象とした。誇大群の結果では、“大切”が圧倒的多数を占めた。しかし、これは他群でも最高頻度を示す紋切り型的反応である。この群で特に多く見られたことは、“大好き・楽しい”が高頻度を示したことも考慮すると、この群が、実際には対人関係をまったくもてない強度の誇大特性を示す被験者ではなく、主張性・賞賛願望などに見られるような社交的態度を中心とする被験者で構成されていることを示唆する。その他、独自のものとしては“距離を保つ”や“まあまあ”が低頻度ながら見られた。前者は友人関係への入り込みにくさ、後者は友人関係そのものをあまり重視しない姿勢を示唆すると解すれば、誇大特性に一致する。過敏群でも、“大切”が最も多く見られたが、誇大群・適度群に比較するとかなり少ない。また、“たくさんほしい・仲良くなりたい”や“大好き・楽しい”が多数見られた。これは過敏特性としては不一致であるが、実際には、対人場面からの引き下がりを中心とする強い過敏特性ではなく、周囲の人たちへの過剰な気遣いを中心とする緩和された過敏特性を示す被験者で構成されていることを示唆するのかもしれない。ただ、少数であるが“狭く深く・少なくてもいい”や“難しい・分からない”という回答群が見られ、これらは過敏特性と一致する。両有群でも、“大切”が最も多く見られたが、誇大群・適度群と比較するとかなり少ない。“少ない・少なくていい”、“難しい・分からない”が相当数見られ、友人関係に困難を感じていることが予想される。それに対し、“楽しい・いい”もかなり見られ、これは誇大特性の反映であると考えられるが、他群で見られた“大好き・楽しい”と比較すると表現が穏やかである。“もっとたくさんほしい・仲良くなりたい”も少なからず見られたが、誇大特性の反映である可能性がある。適度群でも、最も多く見られたのは“大切”であったが、誇大群ほど多くはない。その他、この群でも肯定的な回答群、否定的な回答群ともに見られたが、表現としては一般的で特異なものは見出しにくい。

まとめ

本研究では、自己愛的人格に関する資料を得るため探索的な相関分析、クラスター分析、文章完成法による自己意識の分析を行った。その結果、以下のような示唆が得られた。

まず、相関分析では、誇大特性と過敏特性で表面的な相反性とは異なり複雑な関係があることが示唆された。また、特に自己像の領域で負の関係が、一方、対人関係の領域では正の関係があることが示唆された。

次に、クラスター分析の結果、内容的に妥当な4クラスター解が得られた。各群の下位尺度得点の平均に基づき、それぞれ誇大群、過敏群、両有群、適度群と命名された。また、自己愛的人格を縦軸とし誇大特性と過敏特性を横軸とした平面上に、全被験者の分布を表現する図式が仮説的に提案された。

最後に、各クラスターで自己意識に関する文章完成法を整理し検討した。その結果、一部で誇大群の中に過敏特性をうかがわせる回答が、過敏群の中に誇大特性をうかがわせる回答が見られたと同時に、両有群が最も否定的な自己意識を有していることが示唆された。

しかしながら、以上の分析は、いずれも補足的・予備的資料としての性質を持つものであり、いずれも今後の研究課題の方向性を示唆する程度のものである。特に、文章完成法を用いた結果は、その手法の性質上不安定で錯綜したものにならざるを得ず、もとより検証的性質に耐え得るものではない。

したがって、今後仮説検証的な研究を通じて、より正確に検討されるべき課題である。

<注>

1) この図式はあくまで被験者集団の分布に関する仮想的な模式図であり、数量的な厳密さには対応していない。中でも、両有群が下位尺度平均で過敏特性優位な値を示したことはこの図式には反映できていない。また、縦軸と横軸が直交するとは限らないし、誇大特性と過敏特性を分ける横軸が一次元として表現できるとも限らない。

文献

- 相澤直樹 1997 対人場面における対人恐怖的な悩みの分析 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 548.
 相澤直樹 2002 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.
 Akhtar, S. & Thomson, J. A. 1982 Overview : Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 139, 12-20.
 American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders(3rd ed)*. Washington, D.C. : Author.
 American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders(4th ed)*. Washington, D.C. : Author.
 Cooper, A. M. 1998 Further developments in the clinical diagnosis of narcissistic personality disorder. In E. F. Ronningstam (Ed.), *Disorders of Narcissism*. Washington, D.C. : American Psychiatric Press.
 Frued, S. 1911 (小此木敬吾訳 1983 自伝的に記述されたパラノイア(妄想性痴呆)の一症例に関する精神分析的考察 フロイト著作集9 人文書院)
 Frued, S. 1914 (高橋義孝他訳 1969 ナルシシズム入門 フロイト著作集5 人文書院)
 Gabbard, G. O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice : The DSM-IV edition*. Washington, D.C. : American Psychiatric Press. (館 哲朗(監訳) 1997 精神力動的精神医学—その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床篇; II軸障害 岩崎学術出版社)
 Horney, K. 1939 *New ways in psychoanalysis*. New York : W. W. Norton.
 Jacobson, E. 1964 *The self and the object world*. New York : International Universities Press. (伊藤 洸 訳 1981 自己と対象世界 小此木敬吾・西園昌久監修 現代精神分析双書第II期第6巻 岩崎学術出版社)
 Kernberg, O. F. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. London : Jason Aronson.
 Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York : International Universities Press.
 Kohut, H. 1977 *The restoration of the self*. New York : International Universities Press.
 Millon, T. 1969 *Modern psychopathology : Approach to maladaptive learning and functioning*. Philadelphia : WB Saunders.
 Millon, T. 1998 DSM narcissistic personality disorder : Historical reflections and future directions. In E. F. Ronningstam (Ed.), *Disorders of Narcissism*. Washington, D.C. : American Psychiatric Press.
 Mullins, L. S. & Kopelman, R. E. 1988 Toward an assessment of the construct validity of four measures of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, 52, 610-625.
 Murray, H. A. 1938 *Explorations in personality*. New York : Oxford University Press. (外林大作(訳編) 1961 パーソナリティ I 誠信書房)
 O'Brien, M. L. 1987 Examining the dimensionality of pathological narcissism : Factor analysis and construct validity of the O'Brien multiphasic narcissism inventory. *Psychological Reports*, 61, 499-510.
 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴— 教育心理学研究, 50, 261-270.

青年期自己愛の人格における誇大特性と過敏特性の関係について－相関分析，クラスター分析，文章完成法を用いた補足的研究－

- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 大石史博 1987 Narcissistic Personalityの心理学的研究(1) 関西学院大学人文論究, 37, 27-44.
- Pulver, S.E. 1970 Narcissism: The terms and the concept. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 18, 319-341.
- Reich, A 1960 Pathologic forms of self-esteem regulation. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 15, 215-232.
- Raskin, R.N., & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Rosenfeld, H. 1987 *Impasse and interpretation*. In D. Tuchett(Ed), *New library of psychoanalysis*. London: Tavistock publications.
- 佐野勝男・横田仁 1960 文章完成法テスト解説－成人用－ 金子書房
- 田中康弘・穂苅千恵・福田周・小川捷之 1994 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究, 12, 121-131.
- 高橋 芳 1998 ナルシシズムの人格特性について－その下位カテゴリーの検討と防衛機制との関係 日本心理臨床学会第17回大会発表論文集, 470.
- 辻 悟 1978 性格検査－投映法 金子仁郎・原 俊夫・保崎秀夫編 現代精神医学大系4 A 1 精神科診断学, 177-285.
- 辻 悟 1998 ロールシャッハ検査法 金子書房
- 上地雄一郎・宮下一博 1992 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の外観[1] 岡山県立短期大学紀要, 37, 107-117.
- 上地雄一郎・宮下一博 1992 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の外観[2] 岡山県立短期大学紀要, 37, 118-127.
- Wink, P. 1991 Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.

